

## with コロナの時代のなかで —人びとの営みを守りあう新しい協働の世界をつくる—

哲学者 内山 節

### ◆はじめに

ウイルスというのは、自分の力では増殖することができず、例えば人間の細胞の中に入ってはじめて増殖します。そうすると、人間の体の中に入るたびに人間を殺していたのでは、結局、自分の生きる世界が崩壊してしまいます。よって、ウイルスにとって理想的な状況というのは、最終的には風邪ウイルス化して共存するのが一番いいわけです。つまり感染力は強くていろんな人に感染するけど、宿主は殺さない。もちろん風邪でも肺炎を起こして亡くなる方はいますが、一般的には風邪ひくだけで終わります。だからウイルスというのは、一般的な法則としては、感染力は強めるけど、毒性は弱めるという方向でいくはずです。なので、今般の新型コロナウイルスも早く人と共生できるように頑張りなさいという感じがします。

それにしても、今ちょっと不思議な状況になっています。例えば、日本でインフルエンザが原因で亡くなる人は、多い年で7000人ぐらいいますが、死亡診断書に死因がインフルエンザと書かれることはまずありません。肺炎や急性心不全など別の病名が付いています。一方、新型コロナで亡くなった人が2200～2300人ぐらいと報告されていますが、コロナに感染していたらどんな病気で亡くなってもコロナが死因になっています。ですので、ちょっと今の雰囲気というのは、必要以上に私たちに恐怖をあおっているという感じがしています。

### ◆コロナ禍の課題とは何か

さらに新型コロナと共に発生した今の社会の状況が怖いという気がしています。いま盛んに、感染防止が経済かというようなことがいろんなところで言われていますけども、感染防止も経済も私たちの課題ではないと思っています。感染症は、はっきり言って防止するということはできません。つまり、緩やかに広がっていくか、急激に広がるかの違いだけです。今まで人類の歴史の中で、感染症でほぼ撲滅したと思われるのは天然痘だけです。私たちにっては、共に生きている社会をどう維持するかということが一番大事な課題なわけです。もし仮に神奈川県で毎日1万人が感染すると、これは社会維持そのものが困難になります。だから、感染はもっと緩やかにしましょうということ



で、注意したり工夫したりするのはいいのですが、努力したら感染が防止できるという話ではありません。

また、経済は私たちの社会を維持するための道具であって、道具は目的にはなりません。ただ、社会を維持していこうとすると、結局、経済活動も含めたいろんな活動ができなければ社会は維持できません。そうした活動を止めてしまったのでは、社会そのものが衰弱していくし、壊れていくということは考えておかなければいけないと思います。私たちはどのような関係を維持しながら、その関係の中で、どのように活動をしていくのかということが求められていると言えます。

僕は今の雰囲気というのは、はっきり言えばコロナファシズムぐらいに思っています。例えば、かつてドイツでは権力を取ったナチス党が上から統制をしていきました。だけど、それに呼応して民衆の下からの統制もありました。また、そうした中で、歴史の発展や科学的にプラスになると主張する専門家たちがたくさんいました。いま風に言えばエビデンス（根拠）的なことを提供しながら、下からの統制運動をしていく人たちに、あなたがたは正義の活動をしていると裏付けを与えていきます。あるいは、それを利用しながら、上からの統制も強めます。こうして、上からの統制と下からの統制と専門家たちの活動という三つが共鳴し合うようなかたちで、ドイツファシズムはできていきました。

例えば、ユダヤ人と一緒にロマ族の人たちが収容所送りとなって虐殺されました。ロマ族というのはヨーロッパのジプシーの人たちです。そのジプシーの人たちやユダヤ人の人たちが、いかに社会を破壊する因子であるのかということを利用して専門家が当時存在しました。それからもう一つ、一種の精神疾患

的な病気というものが、実は脳の欠陥によるものであり、脳の手術をすれば治るという話が出てきた時代でもありました。そうした考えを持った医者たちは、いわば人体実験をやりたいかった。するとそのときに、特にロマ族の人たちがその犠牲に遭うわけです。つまり社会的に役に立たないどころか、害毒を与えている人々たちによる実験をやって、大きな成果を得ることができれば、人類にとって非常にプラスになるんだという根拠です。こうして医者たちがナチ党員化して発言権を持ち、下から医者たちが突き上げていきます。強制収容所での虐殺はヒトラーが初めに言ったというよりも、医者たちの要求によってそれが実現していったのです。

#### ◆いま危機にたたされているのは、関係が脆弱であるという視点

今日の日本の状況を見ていても、いろんな形で上からの統制がかかりながら、それに呼応する下からの統制が見受けられます。そして、それが正しいことであるということを力説する専門家たちがいて、それで一つの統制社会ができながら、まさに分断の社会とか関係が崩壊していく社会ができていく。これはファシズムの形成過程と非常によく似ているということです。そのことの危険性のほうを、むしろ私たちは凝視しなければいけないという感じがしています。

ですから、どのようにしてこの社会を維持するのか。そのためには、どうやって関係を守っていくのか、どうやったら活動を維持できるのかということを実際に考えていかなければいけないと思います。

ただ、一部の関係が細くなっていくのは容認せざるを得ない状況ではあります。やはり、おおぜいで居酒屋に行っただんちゃん騒ぎしようというわけにはいかないわけですから、そういう点はやむを得ないでしょう。でも、そうであるならば、どういう関係は逆に太くすることができるのか。そこを真剣に考えれば、やはり関係が壊れていく。それは社会も壊れるけれども、人間たちの生命活動も壊れていくことにつながります。家にずっと閉じこもることは、人間として生命活動をしていること自体を否定しかねないし、社会の否定にもつながってしまうということです。

今、65歳以上の人にはできるだけ家にいてくださいと自粛を要請している人たち、東京や神奈川の知事も65歳以上です。だから、まず率先して自粛したらどうかと思います。総理大臣やテレビに出ている医学関係者などもそうです。ここには優劣の思想が無意識のうちに働いていて、自分たちは社会に有意義な人間だから65歳以上でも活動しなければいけないけど、社会に対して役に立たない人は家に閉じこもっていると

言われている感じがします。社会的に有益な人間と価値のない人間みたいな考え方で無意識のうちに分断されていくようなことは黙認してはたらいなと思います。

#### ◆伝統社会では、共に生きる社会をどのようにつづけてきたのか

先ほど紹介されたように僕は、東京と群馬県の上野村という山奥の村と両方に家があり、行ったり来たりするような生活をずっとしています。上野村は近代市民社会になっていない、むしろ共同体社会と言ったほうがいいかもしれません。実は日本の共同体は明治以降になって上から壊されていきます。最後は戦時中のように、隣組や五人組をつくったりしながら、国の監視機構に利用しようとして、全く違うものにしてしまった歴史があります。でも、うちの村は本当に山奥ですので、そういうものからかなり免れ、江戸時代の共同体がまだ残っているような雰囲気があります。

そういう視点から社会というのを考えていきますと、欧米の社会は生きている人間がつくっているということになります。一方、日本の社会は自然と人間がつくる、つまり、自然というものが社会の構成メンバーとして、人間と対等の位置を持っているというように捉えられます。上野村では何か課題ができてくると、寄り合いという集落ごとの集まりが開かれて、話し合われます。そのときに、人間の都合だけでものを決めてはいけないというのが村の暗黙のルールになっています。社会をつくっているのは自然でもあるので、自然の意見を反映させなければいけないということです。

それからもう一つ、日本の特徴として、人間の中には生きている人間だけではなく、死者も含まれるという考えがあります。ですから、死者もまた社会の構成メンバーなわけです。これは村におりますと、非常によく分かります。僕は上野村の生まれではなくて、随分前に魚釣りに行って気に入ったことがきっかけで、暮らすようになりました。僕の住んでいる家は若干の代金を払い僕のものになったわけですが、その日から住めました。それは家の前まで道が付いているとか、水道をひねればちゃんと水が出るとか、電気も来ているとか、そういうことがあるからです。

そのときに僕は、昔の人たちが基盤をつくってくれたから自分の暮らしができるわけで、これまでの昔の人たちの努力に対して、ただでもらっているのかなということが気になりました。そこで集落の代表の人の所に行って、せめてほんの気持ちぐらい寄付をしたいと話しました。そうしたら寄り合いで話し合われて、それは家に付いているものだから気にしなくていいですよということで、結局何もしませんでした。村にいと、

亡くなった人たちと関係結びながら、今われわれは生きているという感じが非常に強くなってきます。

私たち近代人は、死者の魂みたいなものは死んだ後もあるんですかというようになってますが、これは明治以降の発想です。昔の人たちの発想は関係が本質です。関係が全ての実体をつくっているという捉え方をしてきたということです。そうすると、死者と関係結びながら生きているから、死者という実体があります。もし死者と関係結ばない生き方をしていると、死者という実体も存在しないと言えます。このことは自然に対しても同じことが言えます。

例えば、上野村の人たちが感じている森と、上野村に来る観光客の人が見ている森というのは、形は同じかもしれないけど、決して同じ森は見えていません。それは関係の取り方が違うからです。自然という一つのものがあるのではなく、実は多種多様な自然が存在していて、それは人間たちの関係の取り方によって変わるとえます。このことを関係本質論といいます。日本の伝統思想の一つの特徴です。

村のなかでも林業者が見ている森と僕が見ている森は違います。上野村の森はこのようにして守らなければいけないというように、村の人たちは森との関係の取り方を共有しています。しかしそれが故に、林業者だけではなく、僕らも同じように自然との関係の象徴として、山の神を大事にしていたり、あるいは、水が湧き出る所では水の神を大事にしていたりします。結局、共有されている関係があるので、その共有されている関係がこれからも無事に展開することを願い祈る。ここに村の土着的な信仰があるという感じがします。宗教信仰という言葉は明治になってできた翻訳語で、江戸時代までの日本の精神史には、宗教の信仰もなかったというようなことがいわれています。土着の信仰は、教義をつくらしていきような宗教信仰とは全く違う世界と思えばいいのかなという気がします。

そうしますと、私たちはこれから、やはりコロナと戦うことよりも、本当にコロナと無事な関係がつくれることを願うとか祈るとか、むしろこうしたことのほうがずっとリアリティーがあります。だけど、祈るだけではなく私たちができる配慮をする。それから爆発的な感染が広がると社会が壊れていくので、そういう問題についてはいろんなことを考えましょうと。でも、やはり関係は無事に維持されなければいけないので、ある種の関係が細くなるのならば、ある種の関係は太くしていくためには何ができるのかということ、真剣に考えていかなければいけないだろうと思います。

◆すべてが結び合いながらこの世界をつくっている社会というものは、自分たちの手の中に置いておか

なければいけません。それが今日のような雰囲気になると、社会が政治家などの手の中であって、私たちはそこに管理されたものでしかないみたいになります。これは返す返すも残念という気がしてきます。さらには、社会の決定権みたいなものが一部の専門家たちみたいなのところに流れると、それも違うでしょう。

もしこの後、非常に効果的なワクチンが作られればいいですが、僕自身はそんなに期待していません。先ほども言いましたが、ワクチンによってほぼ撲滅されたのは天然痘だけです。それから、比較的效果が良かったのは、例えば小児麻痺とか幾つかありますけど、その一方で、近年問題になった子宮頸がんワクチンのように、打たなくてもいい人に打つと大変な後遺症が出てしまいます。遺伝子分析が進んでいるので、作るだけなら1週間もあればできます。ただし、本当に効果があるのかとか、後遺症を出さないか、何年後に問題を起こさないかということはまだ分かりません。ですから、僕の知り合いの医者たちはみんな、ワクチンが日本で打てるようになったとしても、3年間は自分は打たないと言っています。いずれにしても、私たちの社会の問題をワクチンに丸投げしてしまうというのは違うだろうと思います。

効果的なワクチンができたのなら、それはもちろん使えばいいのですが、今後、常に管理されながらしか、私たちの生きる場がないというのは、これは本当に社会の否定だという気がしています。ですので、不安をあおるような専門家たちに流されることなく、しかし注意はしながら、コロナと共存する社会をつくっていくことが必要です。例えば、今回のようなZoomを使った催しもその一つだと思います。この時、映像を流して終わりということではなくて、それをテコにして、何を追加したならば、それぞれの場所で太い関係ができるかというようなことを試行錯誤していくことが重要だろうと思います。こうしたいろんなことを含めて、いま私たちの構想力というのが試されていると考えています。

(うちやま たかし)

「研究フォーラム 2020」  
with コロナの時代と新しい社会の創造  
～誰もが生きやすい多文化共生社会をめざして～

下記 QR コードまたは URL より  
YouTube アーカイブがご覧になれます。



URL [https://youtu.be/uA2M8cz\\_5LQ](https://youtu.be/uA2M8cz_5LQ)